

大会テクニカルレポート

大会名	ハトマークフェアプレーカップ 第34回 東京都4年生サッカー大会 Aグループ		
日時	6月20日(土)6月21日(日)	会場	府中朝日グラウンド・府中少年サッカー場

東京都少年サッカー連盟 委員長 高山 清
技術指導部長 井上 雅志
文責 5B技術指導部長 大和 明志

結果概要

フェアプレー賞 Aグループ シルクロードSC

優勝 Aグループ 府中新町FC

	試合数	得点数	1試合当たり得点数
今大会	24	170	7.1

全体	試合数	得点数	1試合当たり得点数
今大会	96	564	5.9
昨大会	96	420	4.4

講評 東京都少年サッカー連盟技術指導部が目指す理想の選手育成のために

①観て判断する

観て判断することに関しては、常に相手ゴールを目指す意識が高く、FWを狙っての縦パスが多く観られました。但し、選択肢が縦方向への1つしか無い選手が多く、味方FWが不利な状況でもパスを送り、ボールを失う場面も多く観られました。第一に相手ゴールを目指す意識は良いと思いますが、もう少し広い範囲で周りが観れると、違った選択肢も出て来て、よりゴールに繋がる面白いプレーが出て来たかもしれません。選手達が多く選択肢を持てるように、広い視野で観て情報を多く取り入れられるよう指導して行く必要があると感じました。

②判断を伴ったテクニックの発揮をする(ファーストタッチの質・プレーの選択)

判断を伴ったテクニックが発揮される場面では、観て判断する事と同様に常に相手ゴールを目指すプレーが多く、ワンタッチで縦方向へパスする事が多かったです。ゴールを奪うため、相手ゴールへ素早くボールを運ぶ事は大事ですが、周りの状況で縦パスが遅れない状況でも判断を変えられず、ボールを失う場面が多かったです。ボールを止める技術の向上、周りを観て判断する意識が高くなってきますと、選択肢を多く持てるようなファーストタッチのコントロール、相手の逆を取るプレーなどが多く出てくると思います。

③攻守に関わり続ける

攻守共に、ポジションに関わらずボールに近い選手は、ゴールを奪う・ボールを奪う意識が高く関わっていました。但し、ボールから遠い選手達がボールウォッチャーになる事が多かったです。ボールから遠い選手も周りの状況を観て、何が出来るかを考えらるよう指導して行ければ、全選手が攻守に関わる事が出来るように思いました。

④積極的にコミュニケーションできる

良いプレー・ミスしたプレー両方に、選手達で互いに声を掛け合う場面が観られて良かったと思います。具体的に何が良く・何が悪くて、悪かった場合の修正点なども指導して行ければ、選手達自身で細かい指示のコミュニケーションに繋がると感じました。

⑤リスペクトの心をもてる

残念ながらグリーンカードは観られませんが、遅れて後ろからの反則になった場面でも素早く相手選手に謝り、相手選手へのリスペクトが感じフェアプレーが観られました。試合後や大会終了の帰り際、大会運営本部・審判・保護者の方々へ、選手達がお礼をしている場面が多く観られ、全ての方へリスペクトが感じられました。

総評

「Tokyo U-12's way」(①観て判断する②判断を伴ったテクニックの発揮をする③攻守に関わり続ける④積極的にコミュニケーションできる⑤リスペクトの心をもてる)の5項目を重点において、視察をさせて頂きました。

どのチームも常に相手ゴールを目指す意識が高く良かったですが、攻撃の選択肢が前方へのパスだけのチームが多かったです。選択肢を多く持てるように、周りを観て情報を多く入れて判断する事、判断を実現できる技術を身につける事が課題に感じました。

守備面では、積極的にボールを奪いに行くチームが多く良かったです。今後は、ボールを奪い切り、攻撃に繋げられるとよりレベルの高い試合が観られると感じました。

ゴールキーパーに関しては、シュートストップがしっかり出来る選手が多く良かったです。パントキックだけの判断ではなく、状況を観てスローイングの判断も出来る選手の育成が大切に思いました。

1位パート優勝の府中新町FC⑨番の中村選手は、相手の素早いプレスにもボールを失わず突破する判断・技術は、とても良いプレーでした。

ヴィルトゥスSCはゴールキーパーや守備陣からビルドアップを行う唯一のチームで、選手達が攻撃選択肢をチーム全体で多く持つチームでした。今後のチーム・選手達の成長が楽しみなチームでした。

また、今大会から16ブロック(女子)のチームが加わり、ゴールを奪うチャンスまで作っていたので、今後に期待したいと思います。

大会テクニカルレポート

大会名	ハトマークフェアプレーカップ 第34回 東京都4年生サッカー大会 Bグループ		
日時	6月20日(土)6月21日(日)	会場	府中朝日グラウンド・府中少年サッカー場

東京都少年サッカー連盟 委員長 高山 清
技術指導部長 井上 雅志
文責 6日技術指導部長 横山 直幸

結果概要

フェアプレー賞 Bグループ トリプレッタ渋谷

優勝 Bグループ トッカーノ

	試合数	得点数	1試合当たり得点数
今大会	24	166	6.9

全体	試合数	得点数	1試合当たり得点数
今大会	96	564	5.9
昨大会	96	420	4.4

講評 東京都少年サッカー連盟技術指導部が目指す理想の選手育成のために

①観て判断する

観て判断することに関しては、余裕のある中では、顔を上げてまわりの状況を確認しようとする意識が高く全体的に良く出来ていた。但し、プレッシャーを受けた状況の中では、慌ててしまう選手が多く、ボールを簡単に失ってしまうケースが多々あった。また、ミスを恐れているのか、コントロール(判断)せず、ワンタッチで前に出すなど、セーフティーにプレーをする選手が多く見られた。守備では、目の前の選手へのアプローチは早く、プレッシャーをかけに行く・奪いに行く意識は高かった。但し、マークや状況に応じたポジショニングを取れる選手は、少なかった。この年代からオフザボールのときに、攻撃でも守備でも、観て状況に応じたプレーの選択ができるよう、感覚的ではなく、サッカーの原理原則を押さえた上で自分で判断し自由にプレーする力を身につけていく必要があると感じた。だからこそ、自分で観て判断してプレーすることの楽しさを伝えていくことで選手の成長につなげていきたい。

②判断を伴ったテクニックの発揮をする(ファーストタッチの質・プレーの選択)

判断を伴ったテクニックの発揮では、余裕のある場面では、オフザボールでも、ボールを持った後でも、顔が良く上がり、状況に応じた良い判断やテクニックも発揮されていた。しかし、①の観て判断するところ同様、プレッシャーを受けた状況では、オフザボールで周りを見ることも出来ず、ファーストタッチも足元に止めるか相手のいるところにコントロールしていた。優秀選手に選ばれている選手たちは、プレッシャーのある中でも、状況に応じたファーストタッチに工夫が見られ次のプレーにつなげられていた。また、浮き球や動きながらのプレーも優秀選手は、優れたテクニックを発揮していた。プレッシャーのある中で効果的に使えるテクニック(止める、蹴る、運ぶ)をトレーニングから積み重ねて、プレッシャーのある中でも落ち着いて必要なテクニックと動きを発揮できるような習慣化を徹底する必要があると感じた。

③攻守に関わり続ける

ボール周辺では、ほとんどの選手が攻守にわり関わりようとするプレーが多かった。但し、ボールから離れた場所ではより良いポジショニングを取ろうとしたり、状況に応じた動きが少なかった。また、GK選手は、ペナルティエリアでのプレーは出来るが、DFの裏のケアやポジションに関わりようとする選手は、皆無と言っていいぐらいだったと感じた。このようにGKを含めたピッチ上の全選手が状況に応じたプレーやポジショニングなど「関わる質」の部分は今後の課題であると感じた。ミニゲームなどで、サッカーの原理原則を押さえながら、関わり続ける感覚を身に付けさせる必要性があると感じた。優秀選手に選ばれている選手たちやBグループ1位になったトッカーノなどは、運動量も多くボールから離れている状況でも関わりを持ち続けていた。

④積極的にコミュニケーションできる

選手同士の盛り上げる声やミスが出た時の声の掛け合いが出来ているチームが多かった。特に良い雰囲気ของทีมは、チームの中心になっている選手の声のかけ方が前向きで、周りもそれに引っ張られ、チーム全体で頑張ろうという前向きな雰囲気を出せていた。

⑤リスパクトの心をもてる

選手は、ひとつひとつのプレーへの取り組みやチームの仲間だけでなく対戦チームやレフェリーに対しても、大会名のとおりフェアプレーが多くみられた素晴らしい大会であった。

総評

この年代において、まずボールを保持した時(オンザボール)のテクニックの発揮とそのためにオフザボールの時により良い準備(観て判断する)ができているかに重点をおいて、視察を行った。止める、蹴る、運ぶ等のテクニックに関しては、余裕のある中での選手の一人一人のテクニックの質は高く、特にフリーキックやコーナーキック、ミドルシュートのキックの質が高い選手がいるチームが多く見られた。但し、プレッシャーのある中での判断を伴ったテクニックの発揮となると、ミスを恐れているのかセーフティーにプレーすることも多く、まず、失敗しても良いのでトライしてみることやトライが出来る技術を身に付けさせる必要があると感じた。また、トライしていた選手もプレッシャーのある中では、予測や準備の面で課題も多く、観て判断することや動きながらのテクニックの質に関しては今後の課題である。オフザボールでは、ハードワークできる選手も多く見られたが、ボール周辺だけを観て感覚的に動くことから、ボール以外のものを観て効果的にかかわることへ動きの質も高めていく必要があると感じた。ゴールキーパーに関しては、シュートストップの技術は全体的に高く、また、身長がゴールに対してまだまだ低い年代であるが、ハイボールの対応もある程度できると感じた。但し、DFとの連携やビルドアップに関わる選手は非常に少なく、GKを含めたトレーニングを行っていく必要性を感じた。Bグループで1位になったFCトッカーノの選手たちは、一人一人がボールを落ち着かせられる技術があり、オンでもオフでも観て判断しながらゴールを目指すプレーをチームとして取り組んでいた。また、攻守にわり、全員がかかわり続けてプレーすることが出来ていた。優秀選手に選ばれている選手たちは、スピードがある中での、観て判断や判断を伴ったテクニックの発揮、守備でも観て判断し良いポジショニングを取っていた。優秀選手に選ばれていない選手たちも、まわりの状況を観ずに感覚的にプレーするのではなく、自分で観て判断しその中で効果的にテクニックが発揮できるよう、個々のテクニックの質を高めていくとともに、個々のレベルアップをチームのレベルアップに繋げ、より厳しい環境の中でもぶれない技術を身につけて欲しい。

大会テクニカルレポート

大会名 ハトマークフェアプレーカップ 第34回 東京都4年生サッカー大会 Cグループ			
日時	6月20日(土)6月21日(日)	会場	府中朝日グラウンド・府中少年サッカー場

東京都少年サッカー連盟 委員長 高山 清
技術指導部長 井上 雅志
文責 技術指導部 斎藤 拓

結果概要

フェアプレー賞 Cグループ 九曜フットボールクラブジュニア
優勝 Cグループ JACPA東京FC

	試合数	得点数	1試合当たり得点数
今大会	24	120	5.0

	試合数	得点数	1試合当たり得点数
今大会	96	564	5.9
昨大会	96	420	4.4

講評 東京都少年サッカー連盟技術指導部が目指す理想の選手育成のために

①観て判断する

ボールをもらってから観る選手が多く、相手のいる方にコントロールしてしまい簡単にボールを失ってしまう場面やオフの時に攻守において効果的な関わりが出来る選手が少なかった。また、ディフェンスラインでのノージャッジなプレーもあった。ポゼッションをすると奪われるリスクもあるがこの年代から簡単にボールを失わないこと、そのため、オフのときに常に観ること、予測をすることなどの習慣付けが必要だと感じた。

②判断を伴ったテクニックの発揮をする(ファーストタッチの質・プレーの選択)

スペースへコントロールするなどゴール前ではファーストタッチからフィニッシュへ持ち込むなど良いプレーがあったが、自陣ゴール前ではフリーな状況でもノージャッジなプレーが見られた。また、観ているがファーストタッチが足元に入ってしまいヘッドダウンしてしまう選手・選択肢を多く持てないコントロールをしてしまう選手も見受けられた。この年代からテクニック(止める・蹴る・運ぶ)の反復を徹底していかなければならないと感じた。

③攻守に関わり続ける

パスを出した後もサポートをする選手・アプローチを連続で行う選手などプレーの連続性は非常に多かった。ただ、攻守においてボールから遠い選手が何気なくボールを見ていたり、予測をして良いポジショニングをとり続けることはなかなか出来ていなかった。この年代でも全員が常に関わり続ける意識を持ってプレーすることを習慣にしていける必要があると感じた。

④積極的にコミュニケーションできる

ポジティブな声かけが出来る選手が非常に多かったが、具体的な指示・自分のプレーを伝えられる選手はあまり多くなかったように感じた。

⑤リスペクトの心をもてる

スローイン・ゴールキックなど相手チームのボールでも取りに行くなど非常に相手をリスペクトしたプレーが多かった。また、試合開始・終了後の挨拶も大きく、はっきりしたチームが多く、観ている人も気持ちよくなる試合が多かった。

総評

選手一人一人のテクニック(止める・蹴る・運ぶ)は高く、素晴らしかった。特に、ボールを持った時に仕掛けられる選手が多かった。DFからでもチャンスと感じたときは積極的に攻撃参加する選手もいて非常に見応えのある試合が多い大会であった。ただ、よりプレッシャーの厳しい中でテクニックを活かすかすためにも、この年代からオフザボールのときにより良い準備をすること(常に観ること・観ておく)を習慣づけて行く必要がある、とも感じた。

ゴールキーパーに関してはキャッチングなど基本技術は安定してた。また、接触を恐れず勇気を持ってプレーできる選手も多く年々ゴールキーパーのレベルが向上していると感じた。ただ、積極的にビルドアップなど攻撃面で関われる選手・具体的な指示を出せる選手は少ないと感じた。

各チーム球際は非常に厳しかったが、フェア・クリーンに戦い比較的ファールの少ない試合が多く観られた素晴らしい大会だった。

大会テクニカルレポート

大会名 ハトマークフェアプレーカップ 第34回 東京都4年生サッカー大会 Dグループ			
日時	6月20日(土)6月21日(日)	会場	府中朝日グラウンド・府中少年サッカー場

東京都少年サッカー連盟 委員長 高山 清
技術指導部長 井上 雅志
文責 8日技術指導部長 小林 一輝

結果概要

フェアプレー賞 FC南大沢

優勝 Dグループ FCボノス

	試合数	得点数	1試合当たり得点数
今大会	24	103	4.3

	試合数	得点数	1試合当たり得点数
今大会	96	564	5.9
昨大会	96	420	4.4

講評 東京都少年サッカー連盟技術指導部が目指す理想の選手育成のために

①観て判断する

・観て判断することについては、顔を上げて周りの状況を観てプレーしようとする意識は感じられる選手が多かった。女子:南大沢の5番・8番は、特に意識して出来ていた。
・ボールを保持している選手が、自分勝手にパスを出したり、ボールを要求している選手が、自分勝手に動き出したりして、ボールが行き違う場面が多かった。周囲の状況をよく観て、タイミングの良い動きの質を上げていくようにしたい。

②判断を伴ったテクニックの発揮をする(ファーストタッチの質・プレーの選択)

・観て相手の位置を確認して、分かっているにもかかわらず、相手の前にコントロールして奪われたり、目の前の相手にパスを当ててボールを失う場面が多く見られた。
・ファーストタッチで前を向く意識は、とても高く良くなっていると思うが、判断を伴っていたのかと言うと疑問が残る。相手が居ても居なくても、とりあえずファーストタッチで前を向くことを繰り返し、ボールを失う場面も多く見られた。

③攻守に関わり続ける

・1位パートで残った4チームは、前線からの早いプレッシングで相手のボールを奪う意識が高かった。高い位置でボールを奪ってからゴールへ向かう意識やシュートを打つ意識が高い選手が多かった。特に3年生ながらFCボノスの72番は、常にゴールからの逆算をしているような動きをすることが出来ていた。逆を言うと、その4チーム以外は、攻守の交代も遅く、関わり続ける意識は低かった。
・DFラインで常に1枚余らせて守っているチームが多かった。チャレンジ&カバーで自分のマークを捨ててカバーに入っているなら分かるが、初めからセーフティにいくために1枚残して守っていることが多かった。余っている選手が後方でカバーをしてしまうため、1対1の場面で絶対に抜かれないという責任をもった厳しいDFをする選手も少なく、チームとしてのチャレンジ&カバーの意識も低かった。

④積極的にコミュニケーションできる

・ボールを要求する声は、ほとんどのチーム、ほとんどの選手が良くできていた。また、味方の選手がミスをしたときのフォローの声や良いプレーをしたときの賞賛の声も良く出ていた。ボールを保持している選手への具体的な指示、声かけ(〇〇がフリーなど)やオフ・ザ・ボールの時の準備のための声かけ(DFラインの統率など)が少ないので、課題として挙げられる。

⑤リスペクトの心をもてる

・GKが、接触により倒れている選手に気がつき、傍に寄って相手へ手を貸してあげていたところ、ベンチのコーチにGKの選手は怒られていた。ベンチスタッフ、保護者のフェアプレー・リスペクトの意識付けの方が大切のように感じた。
・勝っているチームが、サイドラインを割った相手ボールを急いで取りに行き、渡してあげている場面も多く見られた。負けているチームなら急ぐのは分かるが、勝っているチームでそのような意識をもてるのは良いことである。審判からグリーンカードが全く出なかったのは残念。

総評

・ディフェンスラインから、ただ前に蹴ってしまうことは少なく、ボールを繋ごうとする意識は、全体としても高くなってきている。しかし、ゴールを意識するあまり、縦に速いチームが多く、サイドバックのオーバーラップによるサイド攻撃などは少なかった。コート上のペナルティエリアの幅程度で、ほぼ全ての攻撃が展開されていた。
・GKは、キャッチした後パントキックで蹴り込むチームがほとんどであった。FWが裏に抜けたのを観て判断してのキックならば良いが、ほとんどのキックが相手に渡ってしまっていることが多い。初めからスローイングで味方に繋ごうという意識は低いし、味方DFもボールをもらおうとする意識も低い。
・GKの守備範囲については、昔に比べれば広がってきているが、まだまだ、DFラインの後ろに出たボールに対して積極的に関わろうとしているGKが少ない。相手ゴール前までFWが攻め込んでいても、自陣のペナルティエリアの中から出ないGKも多かった。足元の技術に自信がないのかも知れないが、高い位置でプレッシングをかけることを目指していくのであれば、GKの守備範囲の拡大は、重要なファクターになる。
・2日目の3位パートのチームでは、初日に見られなかった良いプレーも所々で見ることが出来た。裏を返せば、ハイプレッシャーの中での判断やスキルの発揮が出来ていないことになる。ハイプレッシャーの中での日々のトレーニングが、もっと必要であると感じた。
・速くて強くて頑張る選手が良い選手のような雰囲気もあり、もっと「時間を作れる」とか「相手の逆をとる」とか、そのような選手が見られなくなってきているのは、良いのであろうか。